



光岳山頂

南アルプスの光岳はただひたすら長い。畑薙第一ダム長さ 100m の大吊橋（現地表示は 182m）から 7 時間かけて登った茶臼小屋を起点にして、往復するのに 12 時間かかる。しかしこのピストンは標高差にして 250m しかないのもそれほど苦にならないつもりでいた。ところが特に還りの易老岳以降はかなり効いた。前日の 100m 大吊橋から茶臼小屋までの登りでの雨と打って変わって、天気にも恵まれたのが暑さに影響してエネルギーのロスに結びついたのかもしれない。

2011 年に毎日新聞旅行で登った時には“バテたなア”とは思ったが、へばり方は今回の方がはるかに大きい。女 11 人で男 7 人、相変わらず最近は大女天国だ。それにツアーリーダーの清野さんと、ガイドの森下さんが付く。清野リーダーはこの山を、キツくてキケンな山だと表現する。



日の出と富士



聖岳・悪沢岳・上河内岳

さて、光岳大縦走の朝は富士山の横に朝日が昇り始めて絶好の山日和だ。茶臼岳まで上がると、南アルプス南部の重厚な山々が見渡せる。この重厚さが何ともいえない。聖岳・悪沢岳・上河内岳などのかつて登った山々が見渡せる。まあ、季節も秋に近くなったのもう高山植物も少ない。僅かにハクサンフウロとトリカブトがあるくらい。深い林の中を



林の中の縦走

ただただ歩くだけだ。たまに遠くの山が見通せるところがあっても、例によって地味が売り物の南アルプスである。北アルプスで見るとような稜線に残雪の輝きなんていう気の利いたものはない。新田岳分岐のある希望峰や易老岳は順調に通り過ぎる。この分なら光岳まではなんとかなりそうだとしたら、この間は岩のごろごろした登りばかりで結構消耗する。



光岳頂上

静高平まで来てやっと落ち着く。光小屋で荷物をデポして頂上までピストンする。さらに“光岩まで行くことを希望する人いますか”と森下ガイドが聞くと、元気のいいおばさんたち4~5人が手を挙げる。男は一人も応じない。5時間半かけてここまで来て、まだ5時間半かけて戻らなければいけないのである。それに往復30分の追加歩行はこたえるよ。行かない人は山頂から見下ろすだけとする。麓の方から見ると、この岩がピカリと光るので光岳と命名されたいらしい。行かない人は昼食時間が30分延びた。



光岩

還りは、三吉平まではゆっくりとした傾斜で250m下る。そして今度はゆっくりとした傾斜で、易老岳・希望峰・茶臼岳と250m登り返す。これを5時間半で行うのであるから山登りとしては平地歩きのようなものである。いや、かつて若い頃はそう考えていた。しかし、当然休憩を取ると思っていた、易老岳や希望峰のピークをスルーされてしまった時には森下ガイドを恨めしく思った。茶臼岳の手前まで来た時に森下ガイドが、もう戻れるという見通しがついたので、“15分休憩にします”と言った時にはホッとして座り込んでしまった。周りの人にも同様の人が多かった。それまでは休憩は5分であり、休憩中といえども次の歩行に備えて常に立ったままであった。ところが、例の元気ババ連は、“休んだりすると気が抜けるからもう行こうよ”と森下ガイドを急かしている。驚くべきスタミナババ連だ。こいつらの亭主は早死したんじゃないかな。だから山登りにエネルギーの捌け口を見出したんだよ。オー、コワ。早朝5時にスタートして16時半着、やっぱり長い。

2011年に茶臼小屋に連泊した時には、2回とも夕食はマグロの刺身であった。しかし今回の初日は違っていた。オヤジに“マグロの刺身はやめたの？”と聞いたら、“そんなことありません”と言って、2日目はマグロの刺身が出てきた。リクエストの形になったのかな。

夕食後、清野さんにオバチャン連から要請があったということで食堂での反省会が行われた。毎日新聞



茶臼小屋内部

旅行の泊りがけ山登りにもずいぶん参加しているが、こんなこと初めてだ。森下ガイドの近くの席になったので、“最近下りが弱くて困ってるんですよ”相談を持ちかけた。この時はたいした答えは得られなかった。この日で百名山達成という人が男女各1名ずついた。特に男の方は77歳ということで、この日の行動中に、私が“70歳になって近頃思うように歩けなくなって”と言ったら、“何だ、そのくらいで”とバカにされてしまった。アルプスクラスの山登りはそろそろ終わりにするかと考えていたが、まだ早すぎるのかなあ。あと8つ登れば、100名山を2ラウンドこなすことになるという、これはすごい。100名山や300名山をやり尽くしたという人には結構出会うが、2ラウンドやった人には会ったことがない。私の2ラウンド目の百名山は62である。これから38登るのはきつい。残っているのは北海道や九州が殆どになる。

聖平小屋もそうであるが、茶臼小屋も便所は小屋の外である。しかも階段を3回も下る。私は、小便が近いのでちょっと辛い。初日が3回、次の日が2回、夜中に行った。辛いが見返りがある。山の星空の美しさだ。ジョン・ミューアの時ほどは良くは見えなかったが、星空は美しかった。こんな時期にオリオン座が西の上空に輝いていた。これが見られただけでも収穫であり、幸せな気持ちになる。

翌日の降りが始まるとき、森下ガイドが声をかけてくれた。“わたしの後を歩きませんか”、即“お願いします”である。いろいろ教えてもらえたとし、私に合わせて歩いてくれるので、苦手の降りを少ない苦勞でこなせた。ただし、他にも森下ガイドの教えを求める人が沢山いたので2ピッチ位で交代させられた。それでもおかげで苦痛の降りをあまり感じないで済んだ。やれやれ峠を過ぎてもう少しで100m大吊橋というところで、清野リーダーが“ひと月ほど前にここでお客さんが滑落して、全身打撲の重傷になりました”という。彼が案内していたらしい。だから最初にこの山をキツくてキケンであると言ったのだった。

今回はシングルストックを試してみた。ダブルストックであると、ストックに頼りすぎてしまうのでやってみたのであるが、結構うまくいった。ストックは急峻な日本の山には合わないところがあるが、まあいろいろ試してみるのも悪くはない。